

論文審査の結果の要旨

氏名 大村 和人

南朝斉梁時代には女性を題材とした「艶詩」が流行した。その多くは同工異曲で、表現の美を過度に追求したものであることから、流行の原因は作り手である貴族たちの退廃的生活にあるとされ、古来厳しい批判を浴びてきた。本論は、この文学史上の「常識」に疑問を持ち、新たな視点から「艶詩」の再検討を試みたものである。一から四章は、代表的「艶詩」の一つである「三婦艶」と、その母体となった楽府「相逢行」「長安有狭斜行」、及びそれぞれの模擬作に共通して見られる特徴的表現に着目し、その源流と意味を探った。考察の結果、主人公である「三子」(三人兄弟)が、「門→堂→戸・室」と順を追って邸の奥へと移動し、そこで家族と宴を行うというモチーフや、末息子の妻である「小婦」が楽舞演奏を継続することによって、舅や夫を宴の場に留めるというモチーフなど、三詩に見られる定型的表現の多くは、先秦時代の祭祀詩や宴飲詩に由来する祝頌のモチーフであることが示された。またしばしば「無為」「無事」であると詠われる「小婦」の祖型は、祭祀において神をもてなす巫にあることが明らかにされた。ただ高い官位を有し、豪華な衣装や黄金の馬具を身に帯びる「三子」の描写は、先秦時代に類例がなく、漢代に新たに出現したものと推定された。以上のことから大村氏は、「相逢行」「長安有狭斜行」の古辞は、新旧様々な祝頌のモチーフを用い、ある幸せな一家を描いたもので、そこには漢代都市住民の理想が反映していると結論付けた。

大村氏は、これらの作品が同工異曲であると非難されるのを逆手に取り、多くの詩に繰り返し現れる表現パターンには意味があったはずだと考え、その淵源を探った。この視点は極めて独創的であり、「相逢行」「長安有狭斜行」古辞の本質を明らかにすることに成功している。

終章は、作品分析とは異なる視点から、「艶詩」の性格を考察した。終章一節は、斉代に魏晉宋時代の大貴族が衰退し、国よりも家族に関心を向けていた詩人たちが、王朝賛美の詩を作るようになったという先行研究の指摘に基づき、理想的な家族を描く上記三つの楽府は、この時期王朝の平和と繁栄を祈願する歌に変化し、宮廷の宴において、多くの模擬作が制作されるようになったと推定した。

終章二節は、斉梁詩人が創作活動について述べた文章に着目し、宴における「艶詩」の創作を、彼ら自身は「言志」と呼んでいたという事実を指摘した。「言志」は、『毛詩大序』が詩とは何かを語った中に用いられる語である。斉梁「艶詩」は、中国詩歌の伝統から乖離したと批判され、「言志」から最も遠いものと考えられてきた。しかし詩に関する儒家の言説を検討すれば、『毛詩大序』が想定する「志」は集団のものであり、古代における詩歌の存在意義は、集団の和合を実現することにあつたと考えられる。梁朝の宴で制作される「艶詩」は、参加者が和合し、ともに王朝の繁栄を祈願するものであることで、「言志」の文学の伝統を継承するものであつたと大村氏は結論付けている。

本論は、「相逢行」「長安有狭斜行」古辞の祝頌性を明らかにし、そこから派生した「艶詩」が、王朝の平和と繁栄を寿ぐ「言志」の歌であつたという見解を、説得力を持って提示した。祝頌性と女性の描写がなぜ同居するのかなど、残された課題も少なくないが、斬新な発想で、従来の定説に見直しを迫る多くの新知見を提出した点で、その意義はきわめて大きい。よって本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものと判断する。